

予備教育における日本留学試験「総合科目」対策クラスの語彙指導

後藤 倫子、木戸 恵子、中村 祐理子

(留学生別科)

Teaching Academic Vocabularies to Foreign Students of EJU Subjects

Noriko GOTO, Keiko KIDO, Yuriko NAKAMURA

(International Division)

目白大学留学生別科では、日本留学試験の社会科学系の受験科目である「総合科目」の対策クラスを開講している。木戸他（2014）ではそのうち基礎クラスの事例報告を行った。この事例では、授業で取り上げた学習項目は、基礎的な知識の獲得と語彙習得の範囲を広げるきっかけになったものの、本試験への対応には十分とはいえないことが明らかになった。そこで今回は、この基礎の授業に続く「日本留学試験対策（総合科目）応用」のクラスの実践を報告する。このクラスでは、過去の試験問題の解法および試験に即した語彙指導を行っており、本研究ではそのうち語彙指導に焦点をあて報告する。本授業の実践を通して、扱った語彙には日本語能力試験 N2・N3 レベルに相当するものが多いことが判明した。このことは学生の本試験に対する心的バリアや抵抗感の減少につながり、ジェネリックスキルを意識することで、より効果的な指導の実現が可能になることを示唆した。

キーワード：日本留学試験、総合科目、語彙指導、既存知識、ジェネリックスキル

はじめに

日本国内の大学に進学を希望する留学生は、各大学に出願するに際して、独立行政法人日本学生支援機構（以下、JASSO という）が実施する日本留学試験（以下、EJU という）を受験し、その成績の提示を要求されることがある。¹ 目白大学留学生別科（以下、JALP という）に在籍する日本語レベル中級後半、つまり N2 クラス以上に所属する学生は、選択科目で「日本留学試験対策（総合科目）応用」を履修することができる。² N2 クラス以上の学生は、すでに日常会話には困らない日本語力があり、ある程度の文章も読み取ることができる。しかしながら、EJU の試験科目、とりわけ「総合科目」（以下、本試験という）は政治・経済・社会、地理、歴史といった社会科学系の教科であり、日本語学習に用いる教科

書の語彙と使用語彙に隔たりが大きいと、苦手意識が生じてしまう。また、学生の現代社会やニュースに対する関心の低さも試験への心的障壁を高くしている一因である。このような状況の中、EJU 受験が必要なにもかかわらず当科目の受講をためらう学生が多いことは否めない。

1. 現 状

「日本留学試験対策（総合科目）応用」の受講を阻む原因には以下四つの現状が挙げられる。

第一に使用語彙の難しさである。日本語を母語としない学生にとって日本語能力を測る大規模試験には日本語能力検定試験（以下、JLPT という）がある。³ この試験は N5 が最も易しく N1 が最も難しい。当科目受講生は JLPT の N2（中級後半）

レベル程度である。しかしながら生活に根ざした語彙の多いJLPTと、社会科系科目の語彙が多い本試験では扱われている語彙や表現に必ずしも共通性がない。しかも、それらの語彙は本試験に1回しか採用されないような社会、経済に関する内容語であることも多く、その語彙を知らなければ解答が難しい場合が多い。実は、それらの語彙には初級レベルで学んだ漢字を含んでいる場合が多く、そのことに気が付けばある程度意味を類推することが可能なのだが、できるだけ多くの語彙を暗記しようと焦る気持ちが類推力を低下させてしまう。その結果、覚えなければならない語彙が増え、学生を悩ませる大きな原因になっている。

第二に、学生は社会科系科目の既存知識の少なさが挙げられる。出身地にかかわらず、日本と日本を取り巻く国々との関係や政治・社会制度などを初めて学習する学生も存在する。特に地理は地域差が大きく、世界の主な国々の位置を把握していない学生も多い。また、以前学習したことは記憶しているが、内容を忘れてしまっている場合も多い。

第三に市販されている問題集の難しさがある。現在、留学生用に何種類か出版されているが、日本の中等教育向けの受験問題集の内容とあまり変わらないものが多く、語彙や表現などの理解がJALPの学生にとっては難しい。

最後に、非漢字圏の学生で英語での受験も不可能な学生の問題である。本試験は英語での受験も可能である。欧米系の学生は英語で受験できるので、内容が理解できていれば受験に特に問題はない。また漢字圏の学生は日本語であっても語彙に含まれている漢字の意味を知ってさえいれば、さほど問題はないという。しかし、このどちらにも属さない学生にとっては日本語学習と社会科系科目の学習双方が必要となり、大きな負担となっている。

2. 先行研究および本研究の方向

先行研究は、以下の2分野を参考とした。

- ① 非漢字圏学習者の漢字語彙習得に関する研究
- ② 留学生を対象としたジェネリックスキルの⁴に関する研究

①は前述の語彙習得の問題に関わり、②は本試験

の学習と進学後の勉学、就職に必要なジェネリックスキルの関連を調べるためである。

(1) 留学生のジェネリックスキルに関する研究

EJU「総合科目シラバス」⁵には本試験の目的を以下のように記している。「試験科目「総合科目」は、多文化理解の視野からみた現代の世界と日本についてのテーマが中心となる。その目的は、留学生が日本の大学での勉学に必要なと考えられる現代日本についての基本的知識をもち、あわせて、近現代の国際社会の基本的問題について論理的に考え、判断する能力があるかを判定することにある。」(下線は筆者による)

一方、ジェネリックスキルは汎用的な、職業や学問領域を越えて必要とされる能力であり、経済産業省が2006年に「社会人基礎力」、2008年には文部科学省が「学士力」を提唱したことから高等教育を中心に研究、実践が進められている。この能力は留学生においても進学、就職後に必要とされているが、上記の本試験のシラバス内容はジェネリックスキルのリテラシー面をカバーしていると言える。

留学生を対象としたジェネリックスキルの研究は、緒についたばかりであるが、鈴木他(2016)⁶が、「日本語力」、「情報分析力」、「課題解決力」、「チームワーク力」を伸ばすことを目的に授業を実施し考察を述べている。

(2) 非漢字圏学習者漢字語彙習得における研究

非漢字圏出身でしかも英語力も不十分な留学生にとって抽象度の高い漢字語彙の習得は多大な困難を伴う。しかし、前述のジェネリックスキルの一つである語彙力は、状況の読み取りには不可欠な能力であり、進学や就職に大きく影響する。この点に関してはJALPにおいても非漢字圏(ベトナム人、モンゴル人など)の学生は、高等教育機関進学を断念し、専門学校進学や帰国などに進路を変更しているケースがみられる。

非漢字圏学習者の漢字語彙習得に関する研究は、主として二つの流れがある。一つは、字形や意味の分析などを行い、効果的指導方法を探るもの、もう一つは非漢字圏学習者自身の学習スタイルなどに関する研究である。非漢字圏学習者が中級ないし上級

レベルまでの日本語を習得することは、漢字圏学習者に比べ、極めて困難であり、学習者自身のストラテジー、学習スタイルの確立が前提条件となろう。

本研究では、前者の例として金庭・川村（2014）、後者の例として池田（2011）に注目した。前者は、日本語弱者に対する「やさしい日本語」による読解システムの構築の研究であり、抽象漢語などについて中級前半までの日本語による置き換えを行っている。この研究は、本研究による授業実践においても教師による抽象漢字語彙の解釈などに生かされている。

また、後者の池田（2011）は、EPA インドネシア看護師候補生に対する国家試験対策授業において、学習者自身が用いた学習ストラテジーの分析から考案した漢字語彙の新たな指導法を提案している。ここでは、学習者自身のストラテジーとして、①形声文字の音符からの読みの類推、②既知漢字の表意性と文脈からの熟語の意味類推、③内容に関する既存の知識からの未知漢字熟語の意味類推などを挙げ、この点を参考に教材作成を進めている。

以下、3. では授業実践に先立ち、内容を支える語彙の分析を行った。

3. 調 査

木戸他（2014）において、平成 22 年度（2010 年度）2 回目の EJU「総合科目」の過去問題と JALP で使用されている初級・中級クラスの教科書に出現する語彙の分析を試みた。その結果、中級前半までの学習内容において、文型については約 70 %が本試験で使用されているが、語彙については約 30 %程度しか使用されていないことが判明した。そこで、「日本留学試験対策（総合科目）応用クラス」が設置されたことを契機に、複数回の試験の過去問題を使用し、使用語彙のリスト化と語彙分析を行うこととした。

(1) 分析方法

本試験は、各年度 6 月と 11 月に実施される。今回は平成 23 年度（2011 年度）から平成 27 年度（2015 年度）までの 5 年度分の本試験 10 回分の過去問題⁷を文字データ化し、日本語読解支援システ

ム「リーディングチュウ太」で語彙を抽出し、初級・中級・上級のレベル判定をした。

(2) 抽出語彙数と出現回数の傾向

「リーディングチュウ太」において、今回、異なり語数約 3,300 の語彙が抽出された。このうち、本試験において 1 回しか使用されていない語彙数は約 1,700 に上る。地名、人名も多く含まれており、また、出来事や社会制度などに関する語彙も多い。これは 1. で取り上げている第一の問題を裏付けるものである。

(3) 使用頻度の高い語彙の分析結果

本研究では、過去 10 回の本試験のうち半数を超える回数、つまり、6 回以上の本試験に使用されている異なり語数、約 300 の語を八つのカテゴリーに分類し、分析・観察をした。八つのカテゴリーは「名詞（人名を含む）」、「する名詞」、「地名」、「動詞」、「形容詞」、「副詞」、「接続詞」、「その他」である。自立語を分析対象としたので、非自立語で文法的要素である助詞・動詞の活用語尾・接頭語・接尾語などと数詞および助詞相当語句（例 ～における、～を通じて）などは「その他」に分類した。「その他」のカテゴリーの語彙は、今回は分析の対象としていない。

(4) レベルからみた分析

過去 5 年間 10 回の本試験において、6 回以上の試験で出現する語彙は、JLPT N2・N3 相当の中

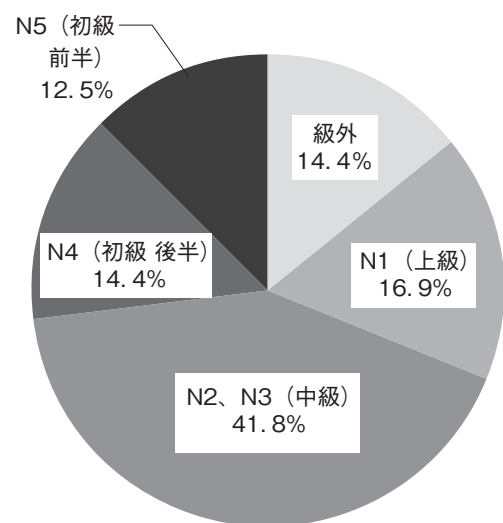


図 1 本試験で 6 回以上出現している語彙のレベル

級レベルが多く、41.8%であった。次に多かったのが、上級レベル（JLPT N1相当）で16.9%であった。出現頻度が高い語彙の中では、JLPT 級外に該当する語彙は14.4%に留まっている。級外と上級レベルの語彙を合計すると31.3%となる。つまり、言い換えると出現頻度が高い語彙のうち、約7割が初級および中級レベルの語彙ということになる。

(5) カテゴリー別にみた分析

「名詞」が49.5%、「する名詞」が23.6%、「地名」が8.0%で、名詞だけで80%を上回る。文の述部になりえる動詞は12.8%、形容詞は4.5%と少ない。このことから、本試験の設問や選択肢の文の述部には「名詞」、あるいは「する名詞」が多用されていることがわかる。

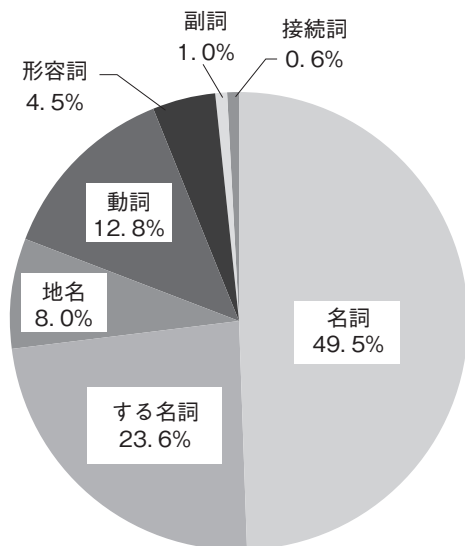


図2 本試験で6回以上出現している語彙の品詞

(6) 「名詞」、「する名詞」、「地名」、「動詞」におけるレベル

「名詞」、「する名詞」では、それぞれ47.7%、50.0%とN2・N3（中級）レベルの語彙が半数を占めている。「動詞」においては、N5（初級前半）レベルの語彙が42.5%と最多であるが、N2・N3レベルも32.5%で、初中級の語彙で75%を超える。地名は級外が80%であるが、実際にどんな地名なのかを見てみると、イギリス、イタリア、中国、ドイツなど学習者に関わりがある国名が多い。

表1 各カテゴリーにおける語彙のレベル

	名詞	する名詞	地名	動詞
級外	12.3%	6.8%	80.0%	0.0%
N1（上級）	16.8%	28.4%	0.0%	12.5%
N2・N3（中級）	47.7%	50.0%	8.0%	32.5%
N4（初級後半）	14.2%	14.8%	12.0%	12.5%
N5（初級前半）	9.0%	0.0%	0.0%	42.5%

(7) 語彙からみた分析

以上、レベル、カテゴリーの面から本試験で使用されている語彙を分析した。それでは、具体的にどのような言葉が本試験で多用されているのか、語彙を概観してみる。

- ① 「空欄」、「組み合わせ」、「グラフ」、「選ぶ」など、試験の解答方法を説明、指示する文で用いられる語彙。
- ② 「政府」、「憲法」、「権利」、「供給」、「保障」など、日本においては高校までの社会科系の科目で習う基本的な語彙だが、日本語学習ではあまり扱われない分野の語彙。（JALP 使用教科書である『みんなの日本語中級Ⅰ本冊』『同Ⅱ本冊』と照合した結果、上記の五つは未習語彙であった。）
- ③ 南北アメリカ大陸およびヨーロッパなどに存在する、日本社会でよくその動向が伝えられる国名や地域の名称。

また、木戸他（2014）でも報告したように、同じ意味でも、「働く人」ではなく「労働者」、「王様」ではなく「国王」など、日常的な言葉の代わりに社会面・教育面などで使用される漢字語彙が多々みられる。

(8) 漢字語彙のネットワーク化

使用頻度の高い語彙の中に「国」という漢字が使用されている語が複数ある。「各国」、「国名」、「国際」、「国民」、「国家」、「国王」、「国内」、「諸国」、「国債」などである。今回作成したリスト全体を見渡すと、「直」、「単」、「流」、「労」、「税」、「発」など、さまざまな言葉の中に共通した漢字が使われていることが見て取れる。また、「冷戦」、「発布」など、一つ一つの漢字の意味はわかるが、組み合わせると意味が変容し、わかりにくくなる社会科系の学習語彙もある。このような漢字を中心に言葉をネットワーク

化すれば、使用頻度の比較的低い、かつ膨大な漢字語彙の学習の効率を上げることが期待できるだろう。

4. 実践報告

(1) 本授業の目的

本授業は3.における語彙の分析結果を基に、中級後半レベル以上のJALP学生が、本試験を受験する際必要とされる知識を限られた時間でできるだけ多く習得できることを目指した。出題頻度の高い内容語を意識するとともに、JLPTにもよく出題される語彙との重なりを考慮し、EJU受験だけでなくJLPT受験、ひいてはジェネリックスキル向上へと広がる道筋を意識した。

(2) シラバスの決定

2.で述べたEJUの「総合科目シラバス」の目的から、以下二つを意識し授業シラバスを決定した。一つは当科目の出題範囲全体を網羅するため、試験問題を解くことを授業の柱とした。1学期の授業数は週1回60分で16週であるが、授業中に過去の試験問題をはじめから順に解いていくだけでは本試験に十分な準備ができない。また効率的な学習も望めない。そこで、1回分の試験問題を政治・経済・社会、地理、歴史、総合の分野別に構成し直した。これにより、分野ごとの出題傾向を把握し、語彙を効率的に覚えられるようにした。本試験は80分で問題総数は約40題出題される。そこで、1問を2分で解くこととし、1回の授業に5問ずつ扱うこととした。もう一つは問題解決能力の育成を意識した。問題を解いた後、単に答え合わせをし、解説して終わらせるのではなく、どうしてその答えを選んだのか、なぜその答えになるのかなど、解法から学びを分かち合うことにした。

(3) 語彙リストの作成

(2)で決定したシラバスに従い、授業で使用する語彙リストを新たに作成した。これは問題を解くことに慣れると同時に、分野別に整理した問題で使用する語彙を効率的に覚えるためである。問題ごとに「リーディングチュウ太」を用い語彙を洗い出し、

解答する際に重要と思われる語彙をリストにした。1回の授業にA4サイズ of 用紙両面にリストを作成すると約30の語彙が扱える。そこで、主に解答に必要なもの、本試験での頻度が高いもの、JLPTでも扱われているものを優先し選択した。条件を整理すると級外とN1、N2・N3レベルのものがリストに並ぶことが多い。また、一度語彙リストで扱った語彙は次回以降のリストでは重複しないようにした。それぞれ「語彙」「読み方」「意味」「例文」の欄を設け、「意味」には学習者が自身のレベルによって母語であるいは平易な日本語で説明が書けるように空欄とした。また「例文」は極力平易な表現で書くことを心がけ、文から語彙の意味が推測できるように記した。このリストに挙げた語彙で翌週の小テストを実施した。なお、「例文」の欄の数字は「0」は級外を、「1」はN1を「2」はN2・N3を表している。

▶ 日本留学試験対策(総合科目)応用				
語彙学習リスト 1 (経済分野) 月 日				
	語彙	読み方	意味	例文
1	～における			0 この国における最重要課題は、教育である。
2	需要	じゅよう		2 近年、中国では日本産の食品の需要が伸びている。
3	曲線	きょくせん		2 このグラフは緩やかな曲線を描いて上昇している。
4	示す	しめす		2 この数字は日本が少子化となったことを示している。
5	仮に	かりに		1 仮に明日彼がここに来たとしても、話すことは何もない。
6	左下	ひだりした		0 画面左下をご覧ください。
7	価格	かかく		2 長雨の影響で、野菜の価格が高騰している。
8	数量	すうりょう		0 弊社では、商品の数量を厳しく管理している。
9	競合	きょうごう		0 わがチームは数々の競合に勝ち、優勝した。
10	他社	たしや		0 弊社は他社に負けないように努力している。
11	上昇する	じょうしょうする		1 今年に入り、物価が上昇している。
12	国内	こくない		0 今年の夏休みは国内で旅行しようと考えている。
13	大幅(な)／(に)	おおはば(な)／(に)		1 景気がよくなり、大幅な賃金引き上げが検討されている。
14	所得	しよとく		1 所得水準が上がると、人々は税金を多く払わなければならない。
15	水準	すいじゅん		2 国の教育水準が上がれば、国民の意識も変わってくるだろう。
16	消費	しょうひ		2 給料が上がると、人々の消費能力も上がる。

図3 語彙リスト例

(4) 授業実施

本語彙リストを使用した授業は2015年春学期と秋学期の2回実施した。春学期の履修者は中国人1名、ベトナム人2名、秋学期の履修者は中国人4名、ベトナム人2名であった。

1回の授業に1分野を扱うようにした。木戸他(2014)の通り、前年度基礎クラスにおいて地理と歴史を扱ったことから、今回は扱っていない経済分野から始めることにした。

1回の授業の流れは以下のとおりである。まず、語彙の小テストをする。これは10問の選択式である。目的は前週学習した語彙の意味が定着しているかを測るためである。次に問題を配り、時間を測って解答する。約10分で5問を解く。問題とともに語彙リストも配る。次に答え合わせ、問題の解説と語彙の意味の確認をする。その際、どのように答えを導き出したのか、自分の方法を紹介したり意見を交換したりする。

(5) 報告

(i) 授業に対する学習者の取り組み方

両学期とも漢字圏と非漢字圏の学生の混合クラスであったため、授業に対する取り組み方に特徴的な違いがみられた。漢字圏の学生にとって、上級レベルの日本語には漢字語彙が増えてくるため、語彙の意味は容易に理解することができる。一方でカタカナ語には苦手意識があるようだった。本試験は日英いずれかの言語で受験可能である。また、日本語による試験にてカタカナ語が多用されているものの、文中あるいは注に英語表記がなされている。(例: ソ連 (USSR)、サッチャリズム (Thatcherism) など) しかし、そのどちらも理解できなければ解答することができず、これは漢字圏であるなしにかかわらず大きな問題であった。一方の非漢字圏の学生は語彙力の少なさが目立ち、既知の漢字と文脈から意味を推測しなければならなかった。2学期ともに英語で受験予定の学生はいなかったため、毎回の学習は大変だったようだ。

特に学習の取り組み方に顕著な違いがあったケースを紹介したい。学生Aは漢字圏、学生Bは非漢字圏で両者とも普段から成績は上位にあった。学生Aは問題を渡されると語彙リストを見ないまま、

まず問題を解き始めた。語彙は漢語であることが多くから見る必要がないという。語彙の意味はわかる反面、問題で問われていることがよくわからないということが多かった。そのため、答えを誤ることが多かった。学生Bはプリントが配られるとまず語彙リストの語彙を順に確認していく。母語の意味と照らし合わせて丸暗記するが、この段階ではまだ意味の理解は限られていると言う。しかし、問題に臨むと多くの問題で正解していた。実際の問題を理解しているか問うたところ、「わかっていないと思う。ただ、全体を眺めていると答えが浮かんでくるように感じる。」と語っていた。また、回を重ねるごとにリストが増えていくのだが、既出の語彙をよく覚えていた。それは繰り返し語彙を目にして徐々に定着させていったからであろう。

(ii) 授業を終えて

今回作成した語彙リストは、当初学習を進める上での補助教材として作成したのだが、それ以上に活用してくれた学生がいたことはうれしい。春学期の履修者3名からも「よかった」との感想をもらった。理由としては、「語彙リストにある語彙と学習語彙が重なっていたから、他の学習にも役立った」、「単語を覚えてから問題を解くので正解率が上がった」、「ほかの科目にない、新しい単語を学ぶことができる」といった意見が上がった。また、授業全般の感想としては、「難しい文章が読めるようになった」や「前よりも日本語のニュースを見るようになった」など、本試験受験以外への効果の波及もあることがわかった。

(i)で学習の取り組み方が異なる学生の例を挙げたが、2学期を通じてクラス全体で感じたことは、漢字圏の学生は漢字語彙が増えると理解できることに安堵し、語彙の意味に固執してしまう一方、非漢字圏の学生は既知の知識で如何に答えを導き出すか、その推測能力を働かせて問題全体を見ている傾向にあるということであった。学生Bのストラテジーは語彙力の強化が推察力を生み、それが内容理解に大きくかかわることを表しているのではないだろうか。非漢字圏の学生は語彙を学習する際、一語一語覚えていく傾向にある。3.(8)で取り上げた漢字のネットワーク化を取り入れたところ、今まで気

が付かなかったという反応を示した学生もいた。例えば、「財政」という語彙を扱った際、「財」の偏は「貝」で、これは金銭に関係する漢字を表しているから、「購買」や「貨幣」が読めなくても意味は類推できる。語彙を覚える際このことを意識していけば、効率のよい語彙力の強化につながるであろう。また、すべての日本語学習はつながりがあり、無駄になることはないということを学生に意識させ、学生が自覚していく方向に導く努力を教師はしなければならない。

おわりに

本試験は単なる社会科系科目ではない。それは進学後に必要とされるアカデミックな素養であることには変わりはない。試験科目のシラバスを鑑みると、EJU「総合科目」を学んだ先にはジェネリックスキルがあるといえる。ジェネリックスキルを身につけるために何が必要かと問われれば、やはり「語彙力」であろう。語彙力の強化とともにジェネリックスキルの向上が期待される。特に漢字語彙力を高めることで漢字から意味の推測力向上が可能になるだろう。また、社会状況と言語能力が結びつくことで、状況を「読み解く力」の強化になる。2016年度からJALPでは「日本留学試験対策（総合科目）応用」は名称と内容を一部改編し、「現代社会事情」となった。これは受験対策に特化したものではなく、幅広い教養を学生に身につけてほしいという意図からに他ならない。

本授業で取り上げることでできた学習項目はこれらの一部分でしかなかったが、上述の事柄を教師が授業時に意識することで、ある程度の成果は現れたのではないだろうか。今後はEJU受験を意識しつつ、より一般教養を高めることを意識した授業を考えていきたい。

註

- 1 詳細は木戸他（2014）、およびJASSO http://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/eju/index.html 参照（2016/10/30 アクセス）
- 2 2016年度春学期以降は、「現代社会事情」と名称を変えて、本試験受験対策に特化したものでは

なく、幅広く教養を身につけられる科目へとクラス内容を改編した。

- 3 JLPT <http://www.jlpt.jp/index.html> 参照（2016/10/30 アクセス）
- 4 学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発した大学教育を通じたジェネリックスキル育成プログラムでは、以下のように定義している。
リテラシー：実践的に問題を解決に導く力（知識を活用して問題を解決する力で、習得した知識を活用することで育成される）であり、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力からなる。また、言語処理能力、非言語処理能力の二つに分類することもできる。
コンピテンシー：周囲の環境と良い関係を築く力（経験を積むことで身に付いた行動特性で、経験を振り返り意識して行動することで育成される）であり、対人基礎力に代表される。
- 5 JASSO（2014）日本留学試験基礎学力科目シラバス改訂版 http://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/eju/about/revision/rev_jaw.html（2016/10/30 アクセス）
- 6 鈴木他は2016年日本語教育国際研究大会において「『発表プロジェクト』の実践は留学生のジェネリックスキルの向上にいかに関与するか」というテーマでポスター発表を行っている。2016年9月10日 鈴木秀明（目白大学）山口恵子（桜美林大学）中嶋めぐみ（目白大学）
- 7 独立行政法人日本学生支援機構（2011）「総合科目」『平成23年度（2011年度）日本留学試験（第1回）試験問題』にほんごの凡人社 pp.113-138
独立行政法人日本学生支援機構（2012）「総合科目」『平成23年度（2011年度）日本留学試験（第2回）試験問題』にほんごの凡人社 pp.107-128
独立行政法人日本学生支援機構（2012）「総合科目」『平成24年度（2012年度）日本留学試験（第1回）試験問題』にほんごの凡人社 pp.109-136
独立行政法人日本学生支援機構（2013）「総合科目」『平成24年度（2012年度）日本留学試験（第2回）試験問題』にほんごの凡人社 pp.107-134
独立行政法人日本学生支援機構（2013）「総合科目」『平成25年度（2013年度）日本留学試験（第1回）試験問題』にほんごの凡人社 pp.115-139

独立行政法人日本学生支援機構(2014)「総合科目」
『平成 25 年度(2013 年度)日本留学試験(第 2 回)
試験問題』にほんごの凡人社 pp.113-135
独立行政法人日本学生支援機構(2014)「総合科目」
『平成 26 年度(2014 年度)日本留学試験(第 1 回)
試験問題』にほんごの凡人社 pp.115-139
独立行政法人日本学生支援機構(2014)「総合科目」
『平成 26 年度(2014 年度)日本留学試験(第 2 回)
試験問題』にほんごの凡人社 pp.113-137
独立行政法人日本学生支援機構(2015)「総合科
目」『平成 27 年度(2015 年度)日本留学試験(第
1 回)試験問題』にほんごの凡人社 pp.113-136
独立行政法人日本学生支援機構(2016)「総合科
目」『平成 27 年度(2015 年度)日本留学試験(第
2 回)試験問題』にほんごの凡人社 pp.113-135

試験対策授業の漢字指導 - 非漢字圏学習者の用い
たストラテジーを生かして -」JSL 漢字学習研究
会誌第 3 号 pp.34-42

金庭久美子・川村よし子(2014)「非漢字圏学習者
に対するやさしい日本語による読解支援のあり
方」『日本語教育方法研究会誌』21 日本語教育
方法研究会 pp.10-11

木戸恵子・後藤倫子・中村祐理子(2014)「アカデミッ
クジャパニーズ習得を目指した予備教育における
日本留学試験対策科目の指導」『目白大学高等教
育研究』第 21 号 pp.95-102

スリーエーネットワーク(2008)『みんなの日本語
中級 I 本冊』スリーエーネットワーク

スリーエーネットワーク(2012)『みんなの日本語
中級 II 本冊』スリーエーネットワーク

《参考文献》

(受付日:2016年10月31日、受理日2016年12月8日)

池田敦史(2011)「EPA 看護師候補生に対する国家